

梅花（高啓）

瓊姿 只合に 瑤台に 在るべきに

誰か 江南に 向つて 処々に 栽えたる

雪 満ちて 山中 高士 臥し

月 明かにして 林下 美人 来る

寒は 依る 疎影 蕭々の 竹

春は 掩う 残香 漠々の 苔

何郎 去つてより 好詠 無し

東風 愁寂 幾回か 開く

瓊姿只合在瑤臺 誰向江南處處栽  
雪滿山中高士臥 月明林下美人來  
寒依疎影蕭蕭竹 春掩殘香漠漠苔  
自去何郎無好詠 東風愁寂幾回開

解説 梅を詠じた詩。

語釈 ※瓊姿 玉のように美しい姿。梅花の形容。 ※合 当と同じで、まさしくべきにと読む。そうするのが当然である。 ※瑤台 玉をちりばめた美しい御殿。仙人のいる御殿。 ※江南 江の南。 ※高士 臥 高士は隱者など、世俗を離れている人物。 ※美人 来 唐の柳宗元の撰といわれる。 ※疎影 梅のまばらな影。 ※蕭蕭 もの寂しいさま。 ※漠漠 連なっているさま。

※何郎 梁の詩人何遜のこと。 ※東風 春の風。 ※愁寂 寂しいこと。

通釈 玉のように美しい梅の姿は、当然、仙人の住む御殿に有るべきなのに、だれが人間の住む江南の地に、あちらこちら植えたのである。雪が降り積つた時、山中に高士が寝ている様に気高く、また、月が明るく輝いている時は、林下に美人が立っている様になまめかしく美しい。梅のまばらな影は、もの寂しい竹によりそつて寒そうに見え、散つた梅の残香が、一面に生えている苔に宿しているのは、春が、そこに覆われているようである。梁の何遜は、梅を愛してすぐれた詩を作ったが、今は、その人も去つてすでになく、春風の吹く頃には、寂しそうに、毎年花を咲かせている。